

大洗動乱編

聖グロリアーナ騎兵隊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大洗へと飛び級した愛里寿と普通に進学した結城翔平。

入学と同時に再開された戦車道。その隊長を任される愛里寿と雑用の結城。

初心者を超える動きを見せる大洗メンバーに驚愕する二人。これならいけるか？と思うが戦車が足りない。経験も足りない。無い無いづくしの大洗戦車道が今始まる。

大体15話前後での完結目指しています。生暖かく見守って下さい。

戦車探しに始まり、練習試合・全国大会と進めていくつもりです。

目次

第一章 開幕編

都合のいいプロローグ

1

第二話 練習試合

3

思いでと抽選会と

7

番外編

ペリーくるしみます

10

第二章 全国大会開幕

騎士団長ヤイカ上

15

騎士団長ヤイカ戦

17

一回戦終了そして、

20

第一章 開幕編

都合のいいプロローグ

大洗学園その戦車倉庫の前に履修者が集められていた。総勢24名。内訳は、生徒会3名・歴女4名・バレー部4名・そして、三人組の女の子に癖ツ毛の子が一人。そして、俺と愛里寿の二人。まあ共学になったし、可愛い愛里寿と手をつないでたらそりゃあ注目されるだろうけどね？そんなジロジロ見ないでほしいんだけど。

「あんまり集まらなかったか」

「そうですね。会長」

いや、あれだけ特典付けるからだぜ。タダより高いモノはないっていうしな。あんなに偉そうにしてるんだ。少しくらい痛い目を見ないとな。また、干芋を食べ始めた。授業中の飲食って禁止されてたはずなのに。

「あのく戦車道って乙女だけの武道じゃなかったんですか？」

「じゃあ、気になっているであろう結城の紹介でもしようか」

「結城翔平って言います。7月7日が誕生日で、かに座のAB型です。家が無幻流の家元をしていますが。雑用扱いですけどよろしくお願ひします」

「私は島田愛里寿。10月24日産まれ。飛び級で入学しました」

俺と愛里寿の自己紹介も終わり、へえー。ほー。へえー。と騒ぎが収まったころ。癖ツ毛の女の子が手を挙げて一言。

「それで、戦車はティーガーですか？パンターですか？」

「んん？それは開けてからのお楽しみ」

かーしま開けてという一言で、戦車倉庫の扉が開かれた。そこにはポロポロになった4号戦車が鎮座していた。あれ？たった一両だけ？なんか嫌な予感が・・・

「じゃあ探しにいくらか」

会長の一言で校内を探索することになった。俺と愛里寿の二人

だったが、後ろから追ってきた秋山さんが加わり三人となった。三人で向かったのは、いつもお昼を食べる屋上だった。出入り口の裏側に戦車があるらしい。まあ死角になるところに置くのはいいかもしれないが、どうやって持ってきたんだろう？

「ありましたKV1Sですよ！」

「1Sか」

「1Sと馬鹿にしないで欲しいであります。あの強力な122mm砲が見えないのですか？それに「分かりました」それならいいです」

くっそ年上の癖になんであんな顔するんだよ。フリーだったら惚れてるだろうが。愛里寿を抱きしめることで、俺は、平静を保つことが出来た。愛里寿も満足そうだし結果オーライという奴だ。さて、見つけたので、連絡を……って連絡先知らんぞ？

「秋山さん、生徒会の誰かに連絡とれますか？」

「結城殿？勿論知りませんが……ああ！」

「普通科棟の屋上に一両KV1S。うん、そう。もう5台ですか分かりました。」

あの？愛里寿さん？誰と電話を……ああ小山先輩ですか。いつの間になぜ。こうしてまた、戦車倉庫前に集合した。そこには、KV1S除く4両が揃っていた。校舎裏にあった、三式中戦車チヌ。林の中に放置されていた、ハツツアー。ウサギ小屋で見つけたM31e。水没していた三突G型。そして、戦車倉庫え放置されていた4号戦車D型。計5両で大洗の戦車道が始まったのだ。

第二話 練習試合

「早速だが来週練習試合を行うこととなった。相手は豎琴高校だ」

・・・?どこ?という空気が場を支配する。生徒会室に集められた各車長たちだ。隊長に就任した愛里寿も聞いたことがないとか呟くぐらいだ。戦車道も始まったばかりだろうと思われた。だが、

「この高校は、近年まで聖グロリアーナの系列であったことを鑑みてもイギリス戦車を使うものと思われる」

この試合も聖グロリアーナから持ち掛けられたと話す広報の河嶋桃。自身満々で話すのはいつものことなのだが、実際に出てきたのは、九五式であった。ただの勘違いであった。そして二戦目。

「こんな言葉を知っている?やられたらやり返す。お前らが後悔するまでな」

「知りませんよ、そんな言葉」

チャーチルを守るために撃破されたマチルダが4両転がっていた。こんな大胆な戦略を披露されると思ってもいなかった。守っていたはずのマチルダが邪魔で思い通りに動けずにしたからだ。

「おやりになりますわね」

「これまでにないデータですね」

砲撃音が頭上に響く。最小の動きで躲してはいるが、天板を抜かれるまでにそう時間がかからないだろうことはペコの目にも明白であった。どうしてこうなったのだろう。と、ペコは思い返した。

「随分と個性的な戦車ですわね」

「私もそう思う」

ダージリンの言に愛里寿もうなずく。愛里寿だって一言いってはいらぬのだ。迷彩の有用性を知らないガ○ダム世代め!!と。別にガン○ムが悪い訳ではない。ではないのだが、ぱつと頭に浮かぶほどの人氣を博しているということだ。金色のヘッツアー。ピンクのM3。三突は赤を押し出しており、主砲は新選組の隊旗になっており、旗が

4本掲げられている。チヌはバレーボール模様が入っていた。KV
1Sがそのままであった。

「ですが、プラウダや、サンダースのような下品な戦いはしませんわ」
そうして、試合が開始された。審判は聖グロの試合に出ない一年生
から選出していた。審判長がニルギリ。副審判がシッキム・セイロン
である。

「試合開始だ。作戦通り頼む」

そしてまずやったことは、車両の入れ替えだった。KV1Sから、
4号D型に乗り聖グロを迎えに行くことである。

「ダーズリン。囷に付き合う必要はないと思うのだけれど」

「それもそうですけど。あんな策じゃあ我々は負けませんのよ。それ
に、8割以上で囷作戦を使うといったのは貴女よ、アッサム」

「そう言いましたが、データ上にはないモノがあります」

島田流の跡取りなんですから、と締めくくるアッサム様。確かに、
だ。あの島田流の人間が安直な囷作戦を仕掛けるとは言い難い。と
私は思った。こんな見え見えの作戦ならローズヒップさんの突拍子
も無い作戦のほうが100倍増だろう、とも考えた。

「ルクリリ周囲を確認して、大洗の車両は」

「周囲敵影なし。4号のみ」

∴。4号以外の敵はいないようだ。なら？普通の囷作戦なのか？
指揮と作戦立案は別々であることもあるが、絶対に違う。普通の囷な
のだろうか。考えが分からない。と私の思考が袋小路に囚われそう
になった時だった。

「高低差を利用しての撃滅狙いね。この先の地形を見れば分かるわ」
「その可能性は97%ですね。細かい指示をだしても到底こなせるよ
うな練度でもないでしょうしね」

ダーズリン様もアッサム様も納得のようだ。先ほどまで何を言っ
ていたんだろうと思うくらいチョロい結論だ。頭が痛くなる。頭を
抱えようとした時だった。

「ペコ、お替り」

私はお替りじゃないとの言葉を飲み込みカップに暖かい紅茶を入れる。広場までもう少しだ。

「ペコこんな言葉を知っている？やられたらやり返す私の気のすむまでね」

「知りませんよ、誰も」

ドリフトをするように広場へ入っていった4号戦車。それを追う我々。すると、3発の発砲。高低差を利用する策であった。半分正解で半分は外れていた。上と後方からの挟撃だった。三突・ヘツツアー・M3が上から砲撃し、その間に4号戦車が後方へと回り視界から消える。

「ローズヒップ、行きなさい」

「はい、でございますわー」

元気いっぱい声を残し、消えていくクルセイダー。そして直ぐに戻ってきた。見つけられなかったのだろうか？

「乗員の交代中でしたので戻ってきましたわー」

とのこと。砲手のプアールさんに詳しく聞き出しました。4号とKV1Sの乗員を交代中で、こちらが主砲をぶっぱなす3秒前にチヌからの砲撃を華麗にかわし戻ってきましたとのこと。私はクルセイダーは好きですけど、クルセイダー乗りは嫌いなんです。分かりますか？ローズヒップさんの厄介さを。あそっういえば、言ってますでしたね。私オレンジペコは装填手兼通信手でもあるのです。

「ペコ、無線機をこちらに。全車前進。挟撃される前に上を叩きますわ」

「フフツ。さあペコ。お仕事の時間よ」

「…。そうですね」

無線機を捕られました。アッサム様に笑われたペコです。装填手用の皮手袋の感触を確かめながら、返事を返す。装甲を通して聞こえるローズヒップさんの声にうんざりしながら。ですが、歩兵支援戦車が多く、乗員の交代を終えた大洗の3両の砲撃で履帯を壊された車両

が出たため（チャーチルVIIと、ルクリリさんの乗るマチルダIIですが）、その場で交戦することになりました。ですが、

「あの亀の子みたいな戦車よく避けるね」

「あれはクルセイダー巡行戦車。機動力でいえば、KV1Sとほぼ互角ですから」

「へえー。そんなに早いんだ」

沙織の言う通り撃破された車両を盾にしたりしつつ、こちらの砲撃を躲していた。チャーチルは数発被弾しているが、撃破されないでいた。私の建てた戦略にはクルセイダーは含まれていないが、別行動をとらないでいる分業をしている。逃げ回られたら大変である。こちらより機動力があり、そこそこの火力。そして経験もある。こちらは機動力に劣り、経験もない素人集団。だから、見え見えの罠を使い、敵を一纏めにした。そして、結果は御覧の通りである。

「状況終了」

よし。勝てた。これでお兄ちゃんに褒めてもらえる。聖グロとの挨拶もそこそこに待ち合わせ場所に急ぐ。会長たちがなにか貰っていたけど今はどうでもいい。待ち合わせ場所は大洗駅近くの喫茶店だ。店に入ると、お兄ちゃんの他にもう一人いた。

「君華お姉ちゃん」

「久しぶりだね愛里寿。元気だったかい？」

継と書かれたジャージに良くわからない楽器を持っていたが君華お姉ちゃんだ。実際には翔平お兄ちゃんの姉で、島田流と親交のある、無幻流の跡取りである結城君華だ。この二人はある時期から愛里寿と一緒に過ごしていた。まあ大好きなお兄ちゃんだが、姉のほうは、直ぐに中学に上がりそれからほとんど会っていないのだが、どういう訳だろうか？

「私が必要無くなったから君たちにとってもね。この鍵と住所の場所にあるから必要なら行ってっくらん」

思いでと抽選会と

その住所の場所は福島県の牧場だった。福島県は、無幻流の本拠地であり、その広大な練習場が牧場として営まれていた。牧場の主は飯島野乃花。元無幻流の門下生で幼い頃から知っている相手だった。

「ふーん。翔平の初恋の人だったんだー」

「棒読みでなんてこというんですか？」

「でも綺麗な人だったじゃん。やつぱり…」

抽選会をまじかに控えたある日のこと。俺は、自動車部の先輩たちとともに姉の君華に渡されたメモの住所に来ていた。目的は、戦力強化である。全国大会を勝ち抜くためには今以上の戦力が必要だという判断である。牧場の片隅にある倉庫に用がある。

「その倉庫には、無幻流の努力の結晶が詰まってるんだ」

「うん。何回も聴いたって」

「もー疑り深いんだから」

無幻流は一撃離脱に特化した流派で、クロムウエル巡行戦車や4号戦車等の機動力があり火力もある車両を多用していた。ここにH型にする為の部品もある。そして、様々なバリエーション車両がある。というのも、戦車道の普及活動に一番力を入れていた流派であるからだ。例えば、ISシリーズにKV2の152mm砲を搭載した車両（砲塔の大きさのせいで5発程しか撃てないのだが）、88mm砲搭載型のパンターや、センチリオン、パーシングを基準に122mm搭載型や、17ポンド搭載型等々である。一番人気は、シユトルムティーガー10台で行う空砲だ。会場の開幕と閉幕に行われるこれが毎回話題となり、あっちこっちの自治体から開催してくれ！と催促が来るほどだった。

「じゃあ開けるね」

「いつの間に」

「鍵位とれないと自動車部に入れないよ！」

自信満々にそういわれるとねっいついそんな気が…全然しねえよ

！なんつーこと平気でいうんだよ。もう少しで信じてどこだったじゃないか。

「信じちゃったかー。しょうがないね」

「ツチャお姉ちゃんが慰めてあげるね」

ぐっ。どうする？どうすればいい？メインヒロインは愛里寿だったはず。ツチャ先輩とは聞いていない。だが、今は愛里寿はいない。くっそ。どうする？どうすればいい？

「(物凄い葛藤してるけど、大丈夫かな?)」

「(ツチャが勝てる訳がないでしょう?)」

「(それもそうだな)」

「(全部聞こえてるんですけど)」

俺が葛藤している間に鍵が開けられ、シャツターが開けられていた。まあ、あれだ。自動車部の先輩たちとの基礎体力の差を思い知った一日だった。とだけ記しておく。そして、家に帰ったら愛里寿に鉄と油と女の子の匂いとか言われたが、断じてツチャ先輩に慰められていないということもすっかり記載しておく。

全国大会抽選会会場。そこには、女子高生が一杯いた。あのパンツアー・ジャケツトは青師団つてところか。無駄にテンション上がってるのが、アンツイオね。おおっ。あの金髪の子を肩車してる人が物凄く可愛い。

「こらっ。どこ見てるの?」

「沙織先輩。ちよつといいところなんで後でいいですか?」

「お兄ちゃんキモイ」

がーん。自動車部と出かけてから愛里寿が反抗期になりました。ええ、とつても不思議です。昔みたいに抱き着いてきてもいいのに、代わりにボコがいる。よし。沙織先輩の言う通りにしておこう。すると、愛里寿も少しだけ機嫌が良くなった。

所定の場所で待っていると、ぽっかりと空白のエリアが出来た。あの一帯だけ空白にする必要もないはず、と思っていたらやたらと大所帯の黒服集団が乗り込んできた。誰かが黒森峰と呟いた。どこかで

聞いたような…。

「ねえ、しゅうりん。ああいう娘がモテるのかな？ほら、あの先頭の娘」

「あれは、ないですよ。あんな仏頂面で隣歩かれたら、ねえ」

「じゃあ。しゅうりんのには誰が好み？」

「あの今転んだ娘かな。放っておけない感じだし。」

「茶髪の娘だよね。へえー。ドジっ子が好みなんだ」

ぐりっ。脇腹を愛里寿に抓られた。解せぬ。黒森峰が所定の場所に座り、抽選会が始まった。最初に昨年ベスト4に入った高校を四隅に散らすことから始める。今年は、16校が出場しているためシードはなし。1番・8番・9番・16番に入った。

「10連覇中の絶対王者黒森峰。万年二番手のプラウダ。練習試合で勝てた聖グロリアーナ。そして物量のサンダース」

ここ10年くらいベスト4は変わらない状態、と解説はしてくれる愛里寿お嬢様。そうだったのか。姉の方が知ってるんだが、連絡つかないんだよな。そして、残る12校なのだが、こちらは、

「今年は五十音順です」

高校戦車道連盟理事長の西住しほさんが引いたクジで決まることになっている。ワッフル高校とかが異議申し立てした年からそうなっているようだ。青師団・アンツイオそして、大洗が引くことになる。

『県立大洗学園、12番』

ボコを抱いたまま引いたクジは12番。初戦から、4強の学校と戦うという事態は回避された。だが、長らく11番を引く人はいなかったが、遂に決まった。

『ボンプル高校、11番』

大洗の初戦はボンプル高校に決定した。

番外編

ベリーくるしみます

廊下を歩く。何でもない事なのに酷く憂鬱になる。向かう先が問題なのだ。未だに隊長として君臨しているダージン様である。思いつきで行動しては、私たちまで巻き添えにされ、いい加減引退して欲しい。だが、あの人がOG会に加入するのが私たちにとってプラスとなるのかマイナスとなるのかは未知数である(プラスのなつて欲しいと切にねがってますよ…)。ああそういえば、自己紹介がまだでしたね。

「あら、そこにいるのはペコちゃんじゃないお姉さまに会いに来たのね」

「ええそうですね。そんなところですよ」

私の紅茶名はオレンジペコ。そして私に喋りかけて来たのは、ダージン様のリアル妹。紅茶名はギャル。見た目は正反対なんですけどね。ミルクティーに良くする奴ですね。本人にもミルクを浴びせてやりたいんですよ。忍耐強いでやりませんが。ダージン様と同格。ローズヒップさんの50倍は厄介な方と覚えていただければ結構です。

「こんな真実を知っている？ ツインテールキャラの貧〇率の高さを」

「〇乳率ですか？」

「ええ。ペコもツインテールにすればいいのに」

イラツ。でも、我慢します。淑女ですから。そういえば、ギャルも結構あるんですよ。私の視線に気づいたのか胸をさらしました。無性にイラツとします。ええ。忍耐力を図るにはこの人はうってつけなんですよ。会って5分もしないでこんなにイラツとする人います。

「私もツインテにしようかしら」

「はあ？」

「じ、冗談よ。冗談」

思わず漏らした声。走るように逃げていくギャル。当初の予定通りダーズリン様のいる隊長室へ向う。次は誰にも会わずに到着できた。

「あら、ペコじゃない。どうしたのかしら」

「ローズヒップさんなんですが」

「ローズヒップなら学園艦GPに出場してよ」

「え？」

「それとニルギリ、ウバも一緒に行ってもらったわ」

「聞いてませんけど」

「それと、後任も発表するわ」

「やっつですか」

「何かいったかしら」

青森港にいるはずのプラウダ高校では、予定よりも大幅に遅れての寄港中だった。理由は唯一つ岩手県に本拠を持つヴァイキング水産との練習試合の為であった。有名校ともなれば、地元で行われる様々な行事に招待されるのだが、今年は年始しか予定がなく、それも遅れている要因の一つであった。のだが、

「ニーナ。アリーナ。今年こそサンタを捕まえるのよ。そしてプレゼント独り占めよ。まあ、ニーナとアリーナにも少し位は分けてあげるわ」

「二だー」

無い胸を張り、宣言するのは、元隊長のカチューシャである。その後ろの控えているのが、ノンナとクララである。黒髪のほうが、ノンナで、金髪の方がクララである。

「作戦はこうよ。私の代わりに部屋で待機して、サンタが来たら捕まえるのよ」

「流石です。カチューシャ」

「一つ気になることが「カチューシャの作戦は完璧です」いえ、確認しておきたいことがあります。カチューシャの代わりにニーナたちが

いるということですね?」

「そうね」

「では、カチューシャ様はどこで寝られるのでしょうか?」

この時ピシリという音を聞いたとニーナは語る。ノンナとクララの間に亀裂が入ったとかどーのこーのと。それ以来彼女たちを見た者はいないという。

「んん。カチューシャ様。私の部屋を提供します」

「いえ、私の部屋を提供します」

「(サンタ役は私がやりますっ言っていましたよね?)」

「(言いましたが、それとこれとは話が別です)」

「ちゃんと喋りなさいよ!!」

「Daa」

「日本語で話さないよ」

全くという感じで頬を膨らめますカチューシャ。それを見て一時停戦した二人。良かったと胸をなでおろす後輩。

「じゃあ、任せたわよ。失敗したらバイカル湖送り18ループルなんだから」

ほんの一瞬で顔面蒼白の二人を残し退室していく三人。後輩にしてみたなら、ノンナを捕まえよと、いう命令である。流石に無理だろうというのが二人の見解である。ノンナを捕まえられる高校生がいるんなら見てみたいものである。

「ドワーチエドワーチエ」

「ぞ、そんなに騒がなくても」

CV38上に乗った彼女にドワーチエコールが巻き起こる。だが、アンチヨビは困った様な顔を見せる。彼女は、推薦での合格をほぼ決めているが、センター試験での出来次第では不合格もあり得るので、ここ最近は無勉強に力を入れていた。息抜きという名目でここに連れて来たのは、カルパッチョとペパロニの二人だ。彼女たちの熱心な誘いに応じたアンチヨビは、こうして大洗まで赴いたのだが、まさか出

場するとは思いいもよらなかつた。その為の困惑である。

「やつてやりますわー」

紅茶片手に赤毛の女の子は叫んだ。聖グロのパンツァージャケットを着こんで元気いっぱいに叫ぶ少女。傍らに二人の少女はいつものことだと優雅に無視を決め込んだ。

ここ大洗町は多くの人で朝早くから盛り上がっていた。アンツイ才生が一番の盛り上がりを見せている。その多くは、学園艦グランプリを見にきていたのだ。大洗学園艦内を一周し、大洗町の規定コースをグルグルと回って大洗学園の校門を通過したらゴールというコースだ。出場したのは、CV38・CV33・4号戦車H型・クルセイダー・ポルシェティーガー・M4シャーマン・2号戦車の7両である。結果はというところ

「やつてられませんわー。つて聞いてますの？ペコさん。それならいいですわー」

「なんでこんな目に」

アルコールは入ってないはずなのだが、酔ってしまったローズヒツプさんに絡まれています。勘弁してほしいんですがね。ダーズリン様とルクリリ様の元には各校の隊長等が集まっており、救援は期待できず、ニルギリさんは、ダーズリン様の代わりに指揮を執っています。忙しそうでこちらも期待出来ませんね。ああアツサム様ですか？兄とオーロラを見に行ってる裏切り者ですよ？まああちらのテーブル程ではないのかもしれないがね。

「マリー様食べ過ぎです」

「なら貴女が食べるの？」

「いいえ、食べませんが」

「なら私が食べるわ」

お皿が積み重なっているあのテーブルも苦労人がいるみたいですね。私にも痛い程分かります。上があだと下が苦労しますもんね。早く、私に譲って欲しいものです。私が隊長になった暁にはスーパージャーナルに乗り込んで17ポンド砲の餌食にします。ダーズリン

様を…。

「では、聖グロリアーナの新隊長を発表しますわ。事前に伝達して…」
新隊長のオツズは、ルクリリ様と私で、ほぼ拮抗している。つまりはそういうことだ。私かルクリリ様が次期隊長にふさわしいと校内の誰もが思っている。しかも、二年連続隊長になるのは、歴史上初という。初めてが私というのもって誰がフラグですか!?!フラグじゃないと確定した未来なんです。こんなにも分かり切った。ってあれ、もしかしなくてもふらぐ…。

「では、発表するわ。新隊長は、ニルギリ貴女よ」

「はい。新隊長に任命されたニルギリです。聖グロリアーナの伝統を守り更なる発展をここに誓います」

宣誓式が終わり、クリスマスパーティーも終わる時刻になりましたが、そこには真つ白に燃え尽きた私があった。ローズヒップさんの相手をし、これだからクルセイダー乗りはなんて思っていた頃が懐かしいです。ええ。コネでの隊長就任でした。チャールルの会長が彼女の母親で、チャールルガンキヤリアと、スーパーチャールルの導入を決定し披露しました。裏目裏目になってしまいました。これから卒業までどう過ごせばいいんでしょうか？

第二章 全国大会開幕 騎士団長ヤイカ上

大洗対ボンプルの試合は市街地戦になった。とある無人島を丸々市街地とした特設の会場は、多くの観戦客で賑わっていた。両校の学園艦の住人や、物好きにも程がある特別船に乗ってきた客等々だ。やはり屋台も多く並んでいる。よし軽く買ってから行くかな。

「ねえ、お兄ちゃん何を食べているの？」

「ソースカツ丼とゆで卵だな。ボンプルの名物として有名なんだって」

「ふーん。そうなんだ。ちよつと頂戴」

愛里寿に奪われたそれは、全て食べられてしまった。愛里寿のちよつとは全てという意味らしい。まあいいさ。それくらいなら、また買えばいいし。んん？視線が凄い。

「私にも下さいな」

あの、華さん？僕そんなに美味しくないですよ？ね？買ってきますから迫ってこないで下さいお願いします。桂里奈も食べたい？砲弾積んでる間に買ってくるからね？このあと、華さんと、桂里奈の二人前だけ買ってきたら怒られた。解せぬ。だけど、緊張してるより、いいかな。初めての作戦会議を思い出す。

「早速だが、第一回ボンプル高校の対策会を開催する」

「チェンジで」

「何だと貴様この河嶋桃に文句があるのか！」

「すいません。口が滑りました」

愛里寿がボコの録画を忘れて家に行ってる間に始まった謎の会議。間が悪い時があるんだよな愛里寿って。受講生全員が集められたのは、空教室だった。この学校妙に空教室が多いんだよなあ。少子化の影響かな。まあそんなことより、桃ちゃん先輩の中では、作戦も対策

も同じらしい。

「ボンプルに関して調べてみたが、何のことも無い。我が校の前では無力だ。秋山に偵察させているが、余裕で勝てるはずだ」

うん。一回で終了だろう。なんてたつて余裕なんて言葉がでてるからだ。姉か愛里寿に聞けばまた良くわかるはずだが、さっぱり分からないのだ。ただ、あの桃ちゃん先輩が余裕とかいう時は何かしら逆の要素というか落とし穴がありそうで怖く感じる。

「これが新聞の切り抜きだ。散発的な攻撃しかできない。もう勝ったも同然だ」

ボンプル高校の昨年の成績は、2回戦敗退。だが、相手が10連覇を成し遂げた黒森峰であることを考えると運が悪かったとえる。何故なら、その試合こそが年間のベストバウトに選ばれたのだから。試合序盤は黒森峰のペースだった。隊長車を撃破し試合終了も時間の問題と思われたが、当時副隊長であったヤイカが指揮を執ると中盤はボンプルが有利になった。

黒森峰包囲網を正面から突破し逆包囲の体制を敷く振りをして逃亡した。そしてゲリラ戦を繰り広げてあと一步のところまで追い詰めた高校であり、今大会も上位確実と言われている。

「充分やっべー奴じゃないかよー」

騎士団長ヤイカ戦

観客席に向かうには、この屋台通りを進んだ方が近いらしい。らしいのだが、まだ人込みがソレなりにあった。戦車道人気が下火とか聞くがそれが嘘だと断言できるくらいには人がいた。それが、モーゼミたいに割れたら反応出来ないよね。

「おっ—ほっほ」

「こら—、待ちなさい—」

「は？」

ゴンツ。食い逃げ犯と思われる似非お嬢様言葉の女の子とそれを追っていたのは、オレンジ色の髪をした背の低い女の子だった。

「いったいじゃん！」

「確か大洗の」

「無視か！」

つという訳で、聖グロのお嬢様達と一緒に観戦することになりました。同級生のオレンジペコ。そして、一つ上のギャルという金髪の変わり者だ。何でも、スパイ機関G16に所属しており、ポジションは通信手だとか言っていたがスパイ機関というものが嘘くさい。お嬢様ジョークだろう。

「では、おすすめをお願いします」

「今日のおすすめは、ウバのミルクティーですネ」

「それで大丈夫です」

「あれ？ペコちゃん？私には何も聞かないのかな？」

そう。聖グロリアーナの観戦席にいたのだ。同級生のオレンジペコ。一つ上のギャルという両手に華の状態だ。何でもギャルという茶葉あるらしい。聖グロリアーナは紅茶の名前や、等級といった紅茶にちなんだ名前を幹部に送る風習があるようだ。そして、ギャルという名の茶葉があることを初めて知った。

「おっ。サンキューってこれ、ホットミルクじゃん！」

「…。忘れてましたね」

「ウバを忘れるなんてドジっ子ねってそんな訳無いでしょって聞いて

ないし」

「はい。こちらが本日のおすすめのウバのミルクティーです」

「ありがとうございます」

見事な突込みを華麗にスルーして、僕の前にティーカップを置くペコちゃん。そして、心持ち僕に席を近づけ座った。彼女もミルクティーを飲むようだ。ティーカップを見、ペコちゃんを見る。ニコッと笑った。そしてギャルさんを見る。わなわなと震えていた。やっぱり仲が悪かったのかなと思っていたら、

「ペコの初恋！決定的瞬間!!」

「違いますけどっ」

やはり、どこから取り出したのか分からない程長い金属バットを取り出しフルスイング。顔面を強襲!!頭蓋骨が折れるような音と共に倒れるのを気にせず一言。

「初恋は終わってますから、気にしないで下さいね」

ただただ頷いた。怖い。あれを見るのは二度目だが、彼女には逆らわないでおこうと決意した。あと、試合が始まっていた。恐怖を気にせず見よう。なんとか集中して。

チヌ・四号D型・三突の小隊と、フラッグ車のヘツツァー・隊長車のKV1s・随伴のM3リーの小隊。二手に分かれて市街地を進む。後方を取られない限り撃破されないとは言われたが、初めての実戦となる私たちは不安だった。

「キャプテン。今からでも」

「弱気になるな佐々木。バレー部復活の時を待つんだ」

「さあガンガン進むぞ」

違うと思うと、操縦手の河西は思った。先頭に位置するチヌがよっつきつと曲がった交差点。ガツンという鈍い音。敵車両からの砲撃だった。続けざまに打ち込まれる砲弾。そして、想定外の敵の数合計9両だった。

「フォーメーションA」

当初の予定では、持久戦に持ち込み、敵を釘付けにすることだった。だが、敵戦力の予想は5両程度であり犠牲覚悟の攻撃ではこちらの背側面や履帯を狙ってくるだろう、との予測はかなり成り立つ。では、その対策のフォーメーションとは？三突を中央に置き、右に4号。左にチヌ。つまり、

「二師匠譲りのバミューダアタック」

一回戦終了そして、

敵フラッグ車は、見晴らしのいい交差点の中央に陣取るように居座っていた。大洗のほとんどの車両の装甲を抜けるその車両は、プーデル・フェレクの愛称で知られている、鹵獲されたパンターであった。パンターとKV1Sの戦いが始まった。

「全速前進！目標敵フラッグ車」

「ヘッツアーとリーは後退。回り込み挟撃態勢をとる」

その一方――

『ボンプル高校TKS豆戦車行動不能』

苦戦していた。実力不足は明らかであり、どうしても、練習の様にはいかなかった。だが、3両目の敵戦車をチヌが撃破した。これで、6対2。4号D型が履帯を打たれ動けなくなるところを集中砲火され撃破された。その隙に三突が7TPを撃破した。その地点から5分も経たずに500mは後退している。

「根性だ。根性で持ちこたえるぞ！次、4時方向の7TPに砲撃」

「我々は正面の7TPに砲撃だ」

ボンプル高校の副隊長であるウシユカは疑問に思っていた。統制射撃を何故しないのか？である。個々が好き勝手に砲撃すれば、回避する余裕があり、片方の砲撃を牽制や囮に使えば、こちらも少しは苦戦するはずだ。なのにそれをしないということは？まだそこまで出ていないのではないか？

「よし、β作戦を発令する。各自散開し、敵部隊を粉碎する」

β作戦。簡単に記すと部隊を二つに分け、後方に回り込んだ部隊が敵戦車をバンバン撃破していくという作戦だ。だけど、遅かった。

「ヘッツアーは0425地点にて、狙撃体制に、リーはフラッグ車の護衛として随行せよ。これで決めるぞ」

プーデルと向き合うKV1S。時間が止まったかのように動きを止める。リーに隠れるように後退するヘッツアーを見送るヤイカ。

それは余裕ではなく、装填の隙を突かれたくないのかもしいない。砲撃する可能性もそれを当然のように眺めた愛里寿。そして、視界からいなくなったと勝手に攻撃命令を下した。

「あの、どうしたんでしよう?」

俺がその声をかけるのはこの場にいる唯一の上級生にしてお嬢様らしい聖グロのギヤルさん。試合を観戦していたらいつの間にか俺の後ろに隠れてしまった。いいところなのに肩の痛みが凄い。そして正面にはずぶ濡れのペコちゃん。何? ナニがあつたの? と混乱状態に陥る俺。そして多分視界に俺が入っていないのだろう例のバツドを向けている。

そして、そのバツドが振り下ろされようとしているのが、この日の最後の記憶だった。後日愛里寿に怒られながら聞いたらノーコンが外し、リーが決めたという話だ。

アンツイオ高校某所

「CV33で攪乱し、セモヴェンテでフラッグ車を狙い打つ。これだ」

「流石つすよ姐さん。これで黒森峰も終わりつすね」

「(アンツイオの火力では精一杯なんですけどね)」

大洗が試合をしていた同日同時刻のこと

「敵全車両ロスト! 繰り返す敵全車両ロスト」

「あつたま来たわ。ミカの奴。どうやって戦車を消したのかしら?」

『無線傍受それに意味があるとは思えないね』

「な、なんではれたのよ…」

『では、お疲れ様』

「サンダース大付属高校フラッグ車走行不能よって継続高校の勝利」

V S プラウダ

雪原のマッププラウダ有利の下馬評を覆し勝利したのは、マジノであつた。

「な、なんでよ。このカチューシャが負けるなんて」

「マドレーヌ様次の対戦相手は大洗だそうです」

聖グロVS???

「聖グロ最速の装填手爆誕ですわー」

「ローズヒップ装填は一発までよ？2発はちよつと」

「撃つのおっそーいですわ」

「はあ?。」